

常盤広町遺跡  
— 東部地区の発掘調査 —

1995

財団法人 水沢市埋蔵文化財調査センター

## 序 文

平成5年11月に埋蔵文化財発掘調査と公開展示施設及び研修室等を兼ね備えた水沢市埋蔵文化財調査センターが胆沢城跡外郭南門前に建設されました。

今まで、市内の発掘調査は教育委員会で行ってきましたが平成6年4月より当センターが発掘調査はもとより考古学資料の展示、考古学研修講座等による啓蒙活動の推進を合わせ実施致しております。発掘調査に終わるだけでなくそれらの文化財のもつ貴重な意義について理解し保護しようとするそんな方向にセンターが機能すれば幸いであると考えております。

現在水沢市内には263か所の埋蔵文化財の遺跡が確認されております。更に、平成6年度には8か所を発掘調査致しました。(石田Ⅱ遺跡、中平遺跡、熊野堂遺跡、車堂Ⅱ遺跡、常盤小学校遺跡、跡呂井館跡遺跡、胆沢城跡、常盤広町遺跡)胆沢城跡を除き7か所の調査は開発計画や個人住宅建設に伴うものであります。埋蔵文化財について従来の考え方は、「まず保護しよう」ということで推移してきたが、現在では「もっと積極的に活用し、整備していくことが必要である」というものになってきています。このような考え方にそって私どもは発掘調査にあたりております。また、そのような主旨のもとに消えゆく遺跡の記録を後世に伝える大事な責務を帯びた報告書であることを自覚し本書の作成にあたりました。

また、速報展により各遺跡の発掘状況や結果については、写真や図で、遺物は展示してお目かけました。本報告書に掲載されている内容はそれらのものを更に詳細に記録保存したものであります。

終わりになりますが、水沢市の埋蔵文化財保護行政の推進にあたりましては、今後とも一層の関係各位のご理解とご協力をたまわりますようお願い申し上げます。

平成7年3月25日

水沢市埋蔵文化財調査センター  
所長 及 川 由 己

# 例 言

1. 本書は、岩手県水沢市佐倉河字瀬ノ上28外に所在する常盤広町遺跡東部地区の発掘調査概報である。
2. 調査は、学校建設工事計画に伴う事前調査として実施されたものであり、水沢市の委託により、水沢市教育委員会の指導のもとに財団法人水沢市文化振興財団水沢市埋蔵文化財調査センターが行った。
3. 常盤広町遺跡東部地区の調査対象面積は5,730㎡であり、うち調査実施面積は6,849㎡である。
4. 発掘調査期間は、平成6年6月7日～平成6年10月8日、以後、平成7年3月31日まで室内整理作業を行った。
5. 発掘調査は、伊藤博幸、高橋千晶、佐々木千鶴子が担当した。
6. 本書の作成は、遺構、遺物の実測及びトレースは調査担当者の外に、千田サノ子、青木綾子、渡辺弘子が行い、写真、執筆、編集は伊藤、高橋が行い、佐々木がこれを助けた。
7. 本書に掲載の地形図は、水沢市都市計画図（縮尺2,500分の1）を原寸のまま使用し、スケールを付していない。
8. 本書で使用する遺構表示略記号は、下記による。  
SD：溝 SK：土壇 SX：その地不明遺構

# 目 次

序 文	
例 言	
I. 遺跡の位置と環境	4
II. 遺 構	6
1. b区	6
2. c区	6
3. d区	8

# I. 遺跡の位置と環境

常盤広町遺跡は水沢市の東郊、東北本線JR水沢駅の東1～1.5kmの田園地帯にある。遺跡の西方は国道4号線水沢バイパスが南北方向に限り、東は南流する北上川に限る。このうち、本年度発掘調査地域は、遺跡の東端地にあたる。

遺跡のある胆沢平野は、北西を胆沢川が、南西を衣川（北股川）が、東を北上川が限り、胆沢町若柳の市野々を扇頂部にして、東方に約20kmの半径をもって、北上川に及ぶ広大な胆沢川扇状地と、北上川の氾濫平野からなる。

胆沢川扇状地は南の高位から北の低位へ順に、一首坂、胆沢、水沢の3段丘に分けられ、遺跡はこの低位面である水沢段丘上に立地している。

水沢段丘はさらに上位と下位面に2分され、下位面はいわゆる谷底平野と呼ばれる胆沢川扇状地最下位の沖面積である。常盤広町遺跡は、この水沢段丘下位面に立地することになる。

下位面である谷底平野は東を北上川に開口し、南北方向の幅が約1.3km、西へ入った奥行は約5kmある。標高は39～45mで、北上川との比高差は約6mある。当平野部を流れる主たる河川には、北寄りに那須川が、南寄りに乙女川があり、それぞれ東流して北上川に注ぐ。遺跡は乙女川右岸の自然堤防上の後背地にあることになるが、これらの2つの主要河川の外、伏流水的小河川も流れており、このため、谷底平野は湿田ないし、半湿田地帯と自然堤防等の微高地を形成している。この微高地は今も主として畑作利用されている。

谷底平野の南は比高差約1～3mの水沢段丘上位面の崖線が東西方向に延びて、これを限る。

常盤広町遺跡周辺の主たる遺跡の分布をみると、本遺跡を中心に谷底平野の北に展開する慶徳遺跡群<sup>(註1)</sup>、南の上位面縁辺に展開する跡呂井遺跡群・杉の堂遺跡群の一部とに分かれ、うち前者の遺跡数は約30箇所、後者は崖線上位面に沿って7～8箇所が確認されている。上位面は奈良時代後半から中世にかけての遺跡が中心で、跡呂井中陣場、同二ツ壇、常盤小学校遺跡などがある。ほかに跡呂井遺跡群に東接して縄文晩期全般にわたる杉の堂遺跡<sup>(註7)</sup>があり、最近では古代末期の集落跡も発見されている。

谷底平野内では、本調査区の北側にある北田Ⅱ遺跡が調査され、大洞C2式土器を含む縄文晩期から平安時代までの3層の遺物包含層が検出されている。下層が晩期の層で、その上が一部に谷起鳥式土器を認める弥生時代の遺物包含層、上層が平安時代である。

常盤広町遺跡は谷底平野を代表する遺跡の一つで、これまで地点を違えて4次の発掘調査が行われてきた。1953年に故伊東信雄氏が中心となって発掘調査を実施した地点は、遺跡の西寄りに当り、東西3.2m×南北2.5mの堅穴遺構を1棟発見している。堅穴には炉跡や柱穴は認められないが、内部から合口甕棺、壺、管玉、ガラス小玉などが出土、さらに甕棺内にアメリカ式石鏝7点が入っており、本果初の弥生土器と土器に付いた靱痕と合わせ、東北地方の弥生文化研究を大きく前進させる画期的発見となった。

1988年、この地点の南西に接して古代末期の水田と水路跡が発見され、翌89年には弥生水田が北東方より発見され、本果初の原始・古代水田跡として注目された。

今回の発掘調査は、これらの成果を踏まえて実施したものである。現状は水田である。



第1図 遺跡位置図 (1 : 25,000)



第2図 遺跡周辺地形図 (1 : 2,500) 発掘区アミ部分

## II. 遺構

発掘調査で発見した遺構には、溝跡5条、土壇跡2、柱穴多数、水田面3枚以上、その他不明遺構2がある（表紙写真、第3・5・6図）。

### 1. b区（第3図）

b区は北端発掘区である。c・d区よりは地盤がわずかに高い。地山は黄褐色シルトである。溝跡SD09は発掘区中央やや南寄りにある東西方向の素掘り溝である。東西端は発掘区外に延びる。溝岸の掘削は緩やかで、溝底及び平面形ともに不規則である。幅は0.7~0.8m、深さ約10cm、埋土は2層で、下層に細砂質の黒褐色土が薄く堆積し、上層に溝埋土の主体となる軟質黒色土がある。上層より土師片が若干出土している。

溝跡SD08はSD09の南側から発見された北東-南西方向に延びる素掘り溝である。南北端は発掘区外に延びる。溝はほぼ一定の幅で掘削されるが、掘り込みは約5cmと浅い。幅は約20cmある。埋土は軟質黒色土単層である。

柱穴跡SA10は発掘区の中央から北寄りに主に発見されたもので、径15~18cm前後の円形ピット群である。削平が著しく、深さは5cm未満、建物などにまとめることはできない。

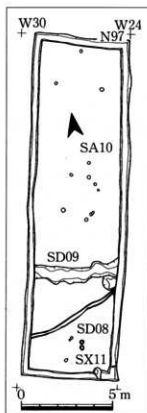
不明遺構SX11は発掘区南東隅寄りから発見された直径40cm前後、深さ約50cmの柱穴様遺構である。平面形は円形だが南壁より落ち込みが溝状に南へ延びる。

### 2. c区（第4・5・7図）

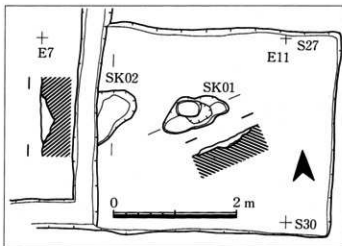
c区はb区の南約60mの地点にある。c区の地山も黄褐色シルトだが、北半寄りで礫層が露出する。

溝跡SD03は発掘区南端から東西方向に発見された素掘り溝で、東西端は発掘区外に延びるため不明である。溝の掘削は比較的いいで、両岸は緩やかな傾斜をもって溝底に至る。規模は上幅で1.5~1.8m、深さ30~35cmある。埋土は下層に厚さ5~10cmの黒色土層、上層に15~25cmの厚さの黒褐色土層が堆積している。いずれにも若干の酸化鉄集積がみられる。溝底には15~20cm前後の川原石が多くみられるが、とくに東寄りが顕著である。また西半部では岸に杭が打ち込まれており、さらに径12~13cm前後の丸太材が数本出土した。土器は土師器、須恵器の破片と中・近世陶器が出土している。

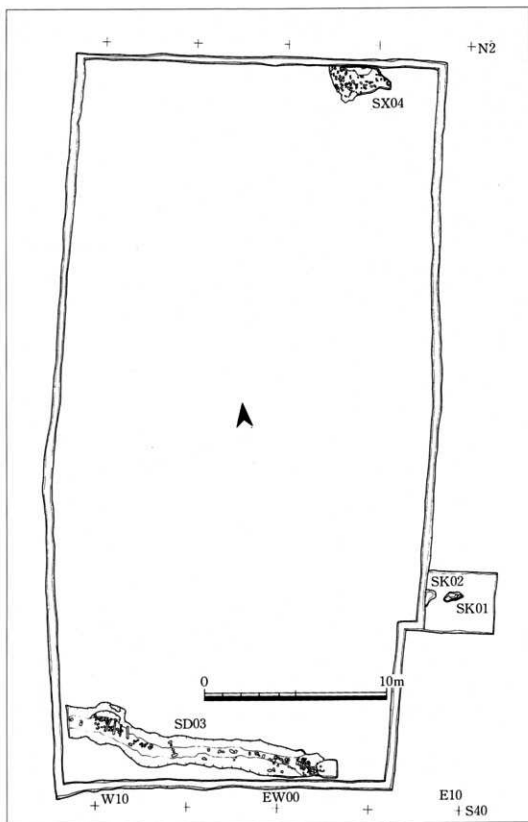
土壇跡SK01・02は発掘区東端南寄りから発見された。うちSK01はSK02のすぐ東側にある土壇跡で、平面形は長軸を東西方向に有する不整楕円形、規模は1.1m×0.55m、深さ14cmある。掘削は總体的にイレギュラーで、下層に薄い暗褐色土を認める外は、埋土はすべて黒色土に黄褐色シルトブロックが混じる層である。埋土中から弥生土器小片が1点出土してい



第3図 b区発掘区全体図



第4図 c区土壇跡SK01・02立割り図



第5図 c区発掘区全体図

る。SK01はSK02の西隣にある土坑跡で、西側で輪郭の一部を欠くが、ほぼ長軸を東西方向にもつ、楕円形を呈すると推定される。規模は1.0m以上×0.65m、深さ22cmある。壁の掘削は緩く外傾し、狭い底部に至る。埋土は単層の黄褐色シルトブロック混りの黒色土層である。

不明遺構SX04は発掘区北壁際東寄りのところから発見された落ち込み遺構である。砂礫層に掘削さ



写真1 上 c区溝跡SD03全景（東から） 下 同溝跡立割り状況（西から）

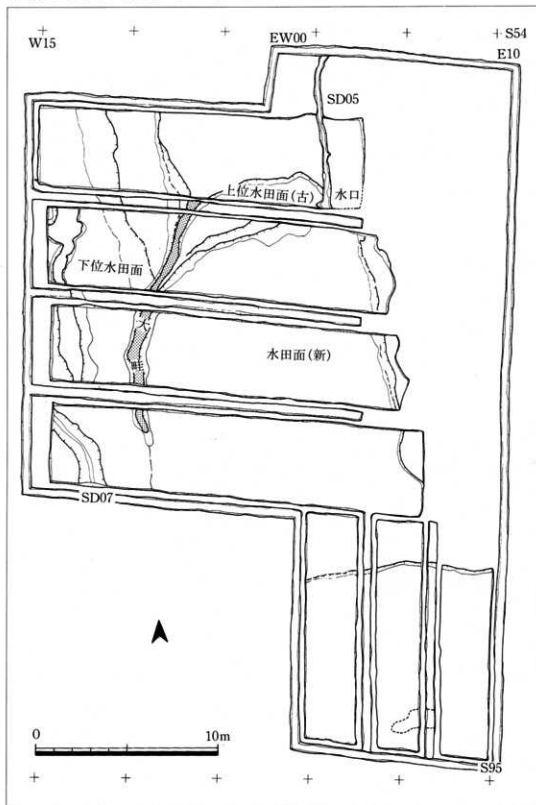
れており、平面形も不規則である。東西3.0m×南北2.0m以上、深さ10cm×20cmある。埋土は砂質ぎみの青灰色シルト層で、酸化鉄粒混りである。

3. d区（第6図）



d区はc区の南に接してある。d区北半東側は黄褐色シルト地山だが、南・西側はシルト質グライ層が広がる。

溝跡SD05は発掘区北寄りほぼ中央に南北方向にある細い素掘り溝で、幅30~40cm、深さ10cm前後ある。掘削は断面U字形を示し、比較的ていねいである。埋土は黒褐色土で、全体的に酸化鉄が集積している。南端は上位水田面新期の水口に相当する。



第6図 d区発掘区全体図

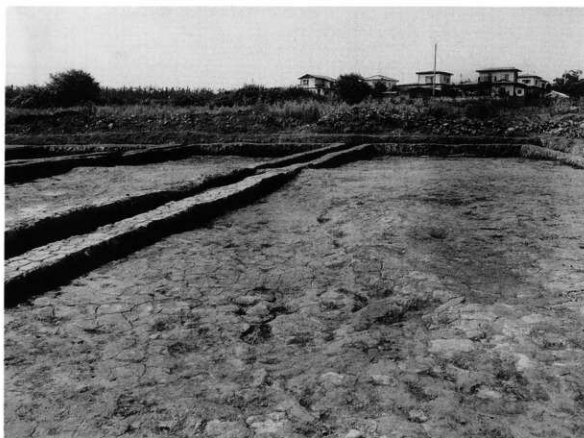
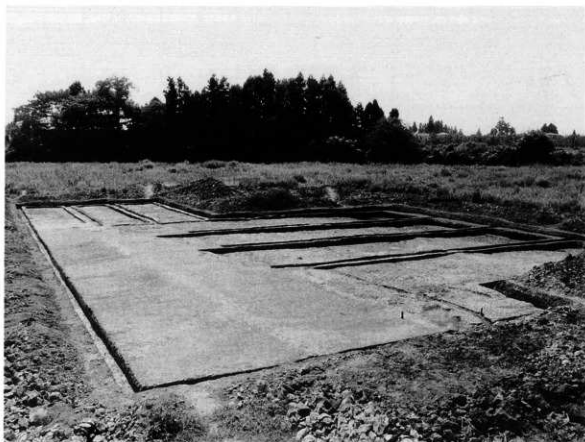


写真2 上 d区発掘区全景（北東から） 下 d区畦畔と下位水田面

溝跡SD07は発掘区西端南隅付近の下位水田面下部からやや蛇行ぎみに南北方向に発見された素掘り溝で、幅1.1m~1.4m、深さ35cm~40cmある。掘削は兩岸ともにていねいで、断面V字形を示し、岸の立上りは急である。埋土は植物遺体を多く含む軟質黒灰色単層で、溝底中央付近から弥生土器甕の破片が3点出土している。

d区発掘区からは水田面が3枚以上検出されている。発掘区中央北寄りにあるのが、上位水田面で基盤土に酸化鉄が集積する古期と、この水田を壊して南側に広く掘削される新时期水田面とがある。後者の基盤土はグライ層である。新时期水田面の北東付近にSD05の水口が付く。上位水田面の西側には南北方向に延びる幅50~60cm、高さ約10cmの大畦があり、これを境に西側にグライ層を基盤土にした下位水田面がある。相互の水田面の比高差は約10cmと下位面が低い。上位水田面の東縁部は黄褐色シルト地山面にあたり、緩やかに立上っている。埋土中から須恵器短頸の甕が出土している。下位水田面は弥生時代の溝跡SD07が埋没した以後作られたものである。

註1 伊藤博幸・佐久間賢外『慶徳遺跡群詳細分布調査報告書』水沢市文化財報告書第9集(水沢市教育委員会、1982年)

註2 a 桜井清彦・林 謙作・西野 修『杉の堂遺跡—集3次発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第4集(水沢市教育委員会、1981年)

b 同『同—第4次発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第5集(水沢市教育委員会、1982年)

c 同『同—第5次発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第10集(水沢市教育委員会、1983年)

註3 伊藤博幸・佐久間賢外『水沢市神明町跡目井中陣場遺跡現地説明会資料』(水沢市教育委員会、1979年)

註4 伊藤博幸・佐久間賢『水沢遺跡群範囲確認調査—平成元年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第21集(水沢市教育委員会、1990年)

註5 1989・90・92年度に発掘調査を実施し、奈良時代の集落跡を発見している。

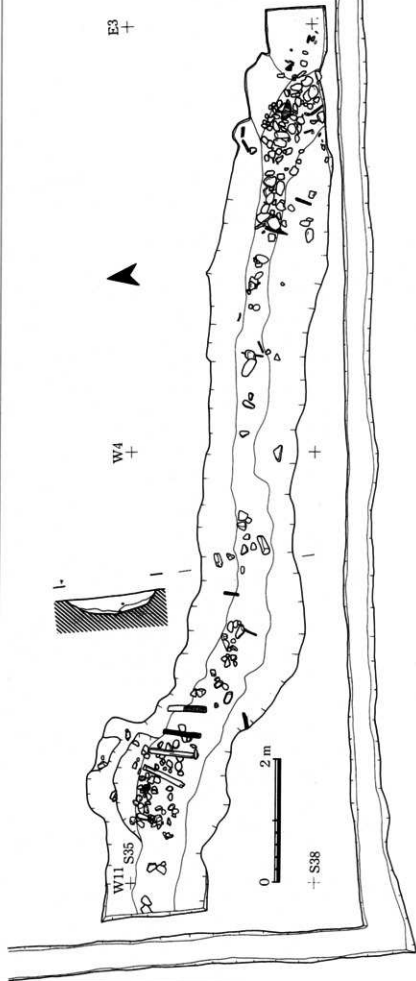
註6 前出註2文献。

註7 伊藤博幸・及川 洵『水沢遺跡群範囲確認調査—平成3年度発掘調査概報—』水沢市文化財報告書第23集(水沢市教育委員会、1992年)

註8 伊東信雄『岩手縣佐倉河村発見の彌生式遺跡』(『古代学』第3巻第2号、1954年)144-154ページ。

註9 伊藤博幸『岩手県水沢市常盤広町遺跡』(『日本考古学年報(1989年度版)』41、1990年)

註10 伊藤博幸『弥生水田跡発掘調査現地説明会資料—常盤広町遺跡』(水沢市教育委員会、1989年)



第7図 c区溝跡SD03実測図



写真3 上 d区畦畔と下位水田面全景 下 d区畦畔と上位・下位水田面

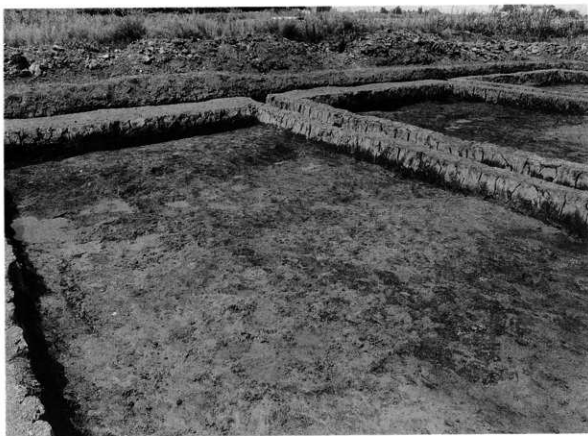


写真4 上 d区西側下位水田面と畦 下 d区溝跡SD07（南東から）

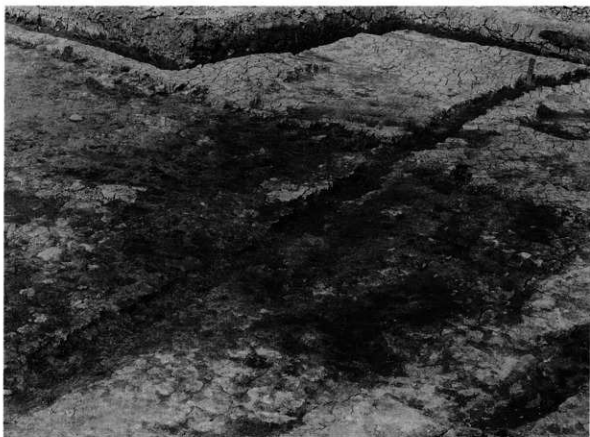


写真5 上 d区溝跡SD05（南西から） 下 同溝跡近景

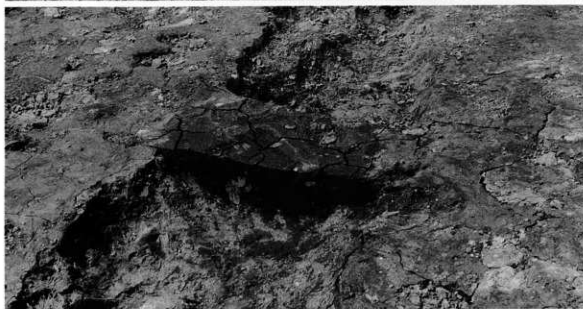


写真6 上 d区溝跡SD05水口（西から） 中・下 同溝跡立割り状況



c・d区発掘区全景（東上空から）  
表紙写真 d区発掘区全景（北上空から）